養老
きよみは
実女
あつま上
梅ら柳

五

養老

次第

風も静かにならの葉の〳〵ならさぬ枝ぞのどけき

詞 抑是は雄略天皇に仕へ奉る臣下也 扨も濃州本巣の郡に不思議なる泉出来るよしを奏聞す 急ぎ見て参れとの宣旨に任せ 只今濃州本巣の郡へと急ぎ候

治るや國冨民も豊にて四方に
道ある関の戸は秋津嶋のやあまさ
かるひなのさかひよろづ代のやすの中
道ちかく養老の瀧よきりく
年を經しみのゝ山の松陰に松を
むす水の緑り那 いかうひかれたる老
の坂げくやまき心られ 故人眠も

年く笑く吾人ハ六十年乃花よ色に心ハ
茅店の月よ嘯き身ハ板橋の霜よ
濡ひ白頭乃雪ハ積れども老を申し
あゝ瀧川の水やこゝろを清くらん
奥山の深谷れ未ゝの夫めしてや流
きを汲とよども絶しく 長生
乃家よこそ老せぬ門ハあるなる

よし年ふる山もとの庵の住
めしも松陰の岩井の水を薬にて
老をのへたるこころこそ尚行末も
ひさしけれ 〈ワキ詞〉いかに是成老人に
尋ぬへきことあれは 〈シテ詞〉此方の事にて候か
何事にて候ぞ 〈ワキ〉汝はきこ
ゆる親子の者か 〈シテ〉さん候是こそ親子の
者にて候へ 〈ワキ〉是ハ帝よりの勅使なるか
あるらんよ 〈シテ〉古籍や雲井の宮遠よみ
うけ給我大君のことのりをぞ賜はさ
るとして今家なる乃古籍にも是
孝親子の民をなく候へ 〈ワキ〉抑も此本巣
の郡にふしきなる泉出くるよしを奏
聞とぞ急ぎ見て参れとの宣旨に任せ

是迄勅使を下さるゝ也先づ〳〵養老と
名付そめし謂を委しく申し候へ
シテ詞 さん候是は此尉が子にて候朝夕山に入て
薪をとりて我らを育み候ふにある時
山路のつかれにや此水を何となくむすひ
くれめば寿常あるゝ心もつかれも
たすかり
ツレ上 さながら仙家の薬の水も

いやとおもはれつゝやがて家路よりは
運び父母にこれをあたへければ
シテ詞 老心
よろこびよ頼る老をも忘れ水
地 あき井の寒し起居もよろこび寝覚
もさびしがりていかにましる水の絶
まことも老を養ふよし養老の瀧とい
也ことさら有難や掬へば今の薬乃

水これ瀧門のうちなるもなかれは荘行
のあるや知らん 古詠く此瀧坪のほと
こし方の岩間よりわき出る水の泉也
掬ひ見しと立よりこれハ元いたきよき
山の井れ 底ともみ渡るされ石乃岩
わとありて昔の山を 番まやちよ
乃くあしきも まろかりある薬

上音
の水 まとよ老を 浪よあり
老をたよ浪れてまして底乃人の
ためよ薬となる何とても壽命を
盡まじき泉をめてたかりきる宮
やまい水のあら上するは代をとて流
乃来乃我らまでも豊よをめる嬉しさ
クリ地
よく ごろや寿く 色尊逢う鳴れ

つきせぬ世のためをもつて薬水を
汲ばよも盡じ 行川の流れは
絶えずして 本の水にはあらぬ流
淀に浮ぶうたかたは かつ消かつ結んで
久しくすめる色とかや 是
いろめも夏山の下行水の藥となる
きずいも誰が為なるらし いさや水を結

きんだく水むすばん 甕頭の
竹葉は陰やみどりを重ぬらん
籬の菊花は林葉の秋をしるはありや
晉の七賢の楽しみ劉伯倫が翫び此
水に猶まさりしめや くめる薬を君の
ために捧まん曲水に浮ぶ盃は石に
さはりてとゞまるとも ごまにさきよりて

おもしろや汲く月も夜のともやあれ
さ月をくまするよ　山路の奥の
水とてハ何れの人か汲ひし　彭祖
が菊の水したゞる露の養ひよ仙家
を受しより七百歳をふるも薬
の水と学あゆを　実や薬と菊のゑ
其養ひの露のまゝよ　千年をふるや

あめのしたひろき恵のあまさき道
花咲宮る理り　其おもと云あふう
明是雨露のめぐミうく　浪ひの
て花の父母たる雨露の翁も養
ひわらく池水よあれ衣乃袖ひちく
結ふ手の隂さえ見ゆる山の井ハぐうも
薬と思ふ若の姿も若水としみるは

嬉しかりけれ　文字経さゝ葉の水
慈悲ありて我君を養ひ参らせこそ
うれしけれ　翁もかく治めくさびろ
き御かげを忘れじとあへ　勅使もしかさね
ぞ感激しらずかねて寿ぎ奉らんと
いひもあへぬ　みつさやあがく天より
ええりかやかうまく瀧の響きも声もみちく

音楽聞こし花ふりぬ　是只事と思はれ
ずとかく　有難や治まる御代のあり
ひとへに山河草木なりやうて五日の風や
十日の雨のあめかさねて見るにえ雲の
あし玉水の薬の泉もつきし
菊有かくのきもいやなと　是とても
捨てぬ御法の水の雲ぬ御代をも守る

なる我等此山神の宮居也 又は
楊柳観音菩薩 神といひ仏といひ
唯是水波の隔にて 衆生済度の
方便の聲 峯の嵐や谷の水音
とう〳〵と拍子を揃へて音楽のひゞ
き瀧津心をすましつゝ諸天来影いきよ
の影向なれ 松陰よる世をうつる

みどりうかふ影もいさぎよき山の井
の水ゝ山井の 水滑として
浪悠なり おさまる御代の君は
ふね臣は水 水よく舩を浮べ
て臣よく君を仰ぐ 御代とて豊く
さても豊きや尽きせじ 君よひさしく
玉水のかみすむ時は下も濁らぬ瀧

津の水乃なぎさの波のおさまりくも
よき御代あれや萬歳のみち
かへりなん

清經

第八重の塩路のうら波八重の塩路乃
浦浪九重にいざや帰らん　是ハ
左中将清經乃家乃内につかへ申淡津の
三郎と申者にて候扨も頼ミつる清經
ハいぬる筑紫乃軍に討まけ給都へハ
迚も帰らぬ道芝てつ乃新粧のまにかくらん

よしやと思ひきるが豊前の国柳が浦に
沖にて更行月の夜舟より身を投
空しく成給ひぬ船中を見れハ
御形見に鬢の髪を残し置て候
かひなき命たすかり御筐を持ちて
都へ上り候此由を都の御方へ参らせ
別れて過つる古郷の昔の

引かへてハあはれなき秋暮てもや時雨
みる程哀しまさる独ね待つそ思ふ
くよよりまりく　急ぐ程に都に着て候
きるや都にすむ人めやよ雲間しつか
より淡津の三郎がまいりたく候
いかにへ　何淡津の三郎とや人
迄もなし此方へ来れ扨何の為

のは使にて候　ワキ「はづかしながら面目もなき御
使にまいりて候　女「面目もなき使とは
もし御遁世にて候か　ワキ「いや御遁世に
ても御座なく候　女「筑紫の軍
にもはつゝがあらじと頼みつるに　ワキ「げにかの
み筑紫の軍にもはつゝがなく候へども
ひしが清經は思召すやう都へは迚も遁れ

ね道芝の雜兵の手にかゝらんよりは
と思召されけるか豊前の国柳が浦の沖
にて夜更人静まりて舟より身を投
空しく成給ひて候　女恨「何と身を投空しく成給ふか
恨みたるやうらめしやせめては討
もしは又やまひの床の露とも消えなば
力なしと思ふべきに我と身をなげ給ふよ

よし偽りなりけるかねごとかな実に恨みても
其かひもなき世となるこそかなしけれ
何事もはかなかりける世の中の此頃
人目をつゝむ我宿の垣ほの薄
吹風の音をもたてず忍び音になく
のみなりしかども今はたれをか憚りの
有明月のよたゞとも何か忍ばん子規

名をもかくさでなくねかな　又舟中を
尋ぬれば鬢の髪を残されて候
是を御覧じて御心を慰められ候へ
是は中将殿の黒髪かや見れば目もくれ
心もきえしかも思ひのまさるぞや見るたびに
心盡しのかみなれはうさにぞ返す本の
やしろにとて手向かへして夜もすがら

涙とともにおもひねの夢になりともみえ給へ
とねられぬにかたふくる枕や恋をしらすらん
まどろまく　聖人に夢なし誰あつ
て現とみる眼裏に塵ありて三界もせまく
心頭事なふして一生ひろしげにやうしと
見し世も夢つらしとおもふもまぼろしの
いづれ跡ある雲水のゆくも帰るも閑

都の故郷にたどる心のあはれさよげにて
ねに恋しき人をみそめしより夢ぞあはれ
へ頼みあるべきぞめよいかに人々清経
こそまいりて候　ふしぎやまどろむ
枕にみえ給ふは清経にてましませ
ど正しく身をなげ給ひしが夢ならで
いかでみえ給ふべきよし夢なりとも御姿

をみえ給ひつる経をさへあかる命を
まゝて我と身を捨てゝ給ふ事は
偽りなりけるかねことなれは恨
めしう候 シテ上 さ様に人をも恨み給はゞ我
も恨みは有明のみよとて贈りし筐をは
何しに返させ給ふらん 女上 いやとよ筐
をみれはいとゞ思ひのあまりしきのたひにみる

たひに心つくしのかみなれは シテ白 うさにそ
かへすもとのやしろにおかれしものをそうし
女上 黒髪をあるひはこひしき形見なりしか
女上 せめてうき世のなくさめとての筐
下 なれしを返されは思ひの乱れかみ シテ白 わきてそ
送りしかひもなく筐をとりかへしてあかぬ恨
女下 我は捨つる命のうさを シテ 互ひにかこち

女「かこたらく　シテ「形見そつらき　女「くろ髪の

上哥「うらみをさへにいひそへてくねる

涙乃手枕をならべてふたりかあふ夜なれど

あれとうらみては獨寝のふしゝく

あるうかあるきこやかゝこゝ中〳〵

うき身あくへ長らへても有あらんと

おもへともぬるゝ殘りれく　シテ「古乃うたを

語てけにきかせ申へしとてハ恨をはれ給へ

上「さても九州山家の城へも敵よせきたる

ときゝし程にとる物もとりあへす

うらたか舟よ取のつて豊前の国柳と

いふ所につく　上哥「けにや所も名をえたる

浦ハ並木の柳陰いとかりそめの皇居を

さためて　「それより宇佐八幡よはし參

語道へしとて神馬七さまさま金銀を捧て
乃ちさき財旨幣のため成へし
荏柄様やを以利も身の恨を似たる事
あれはかさいよ未君ましまし御代乃
ちうはや一門なおそちもとのして侍よ
けおそうりを捨しる城よりあさ
やあらすや「宮く是へは理り去ぬ

うら頼をあさ世の来るしみ苦かろや
はんゆうを経 捕下宮作の情よしまたん
様をうり殊を憐みし桜乃軒さをかきあくも
またくもみよいろ乃錦のうらよりあら
たあるはは拝を出してか計 世の中ならう
ちよへ神もあさめと行いのる緒ん心盡
しま「ちうそもと思ふ心も虫のとるも

よりの思ひ盡ぬ秋の暮に偏へに仏神
三寶も捨果給ふと心細くて一門は
氣を失ひ力を落して足弱車の
すご〳〵と還幸なし奉る哀なりし
有様なり 色 さるほどに長門の國へも
敵むかふと聞しかば又舟に取乗ていづく
ともなく押出す心のうちぞ哀なる

げにや世の中のうつる夢こそ誠なれ保元の
春の花寿永の秋の紅葉とて散り〳〵に
なり浮む一葉の舟なれや柳が浦の秋
風の追手がほなる跡の波しら鷺の
むれゐる松見れば源氏のはたをなびかす
多勢かと肝を消すこゝに清經は心にこ
めて思ふやうさるにても八幡の御託宣

あらたに心猛に強ることなりが流石真乃
つゝ人は帝乃御子と唯一筋に思ひより
あぢきなやとても消ゆべき露乃命を
我をさきうはまうき夢れ良よわすれ
あまたよりひといつまでかうきめを味
鳥の泣きもそんとなきり人はいゝく
岩代乃まつことありや暁の月に嘯く

きしきみく船のへつに立あがり躍より
やうでうぬきまし音もとゞろやうにみつさ
あしの庵やうとうひ朗詠しかゞ
行末せとうみく終はなくつゝあぢあらぬ
ゆらぬかいはくとまろぬか心盡に此世
とても猿ちかし篭之る強さんやとぞよそ
めよいひかる狂人と人やまれんより

人は行たみるめをかり乃衣のそて西に
かたふく月もをしまれていかやうにもつまん
と南無阿弥陀仏弥陀如来迎へさせ給へと
唯一声を最期にて舟よりかつぱと落塩
乃底のみくつと沈ミゆくうき身乃果
ぞ悲しき聞くに心もくれはとりうき
ねに沈む涙の雨の恨めしかりける契り

いふならくならくも同じうたか
たの哀れハ誰もかはらざりけり　扨修羅
道にをちこちのたつきはかたき
雨ハ矢先土ハ精剣山ハ鉄城雲
乃はたてをついてきやうまんの剣をそろ
へ邪見乃眼の光愛欲貪恚痴通
玄道場無明も法性もみだるゝ敵うつハ

波びくへうしまで西海四海の因果をみせ
とくや是迄なりや誠ハ最期の十念乱れ
ぬ御法の舟に頼みしまゝに疑ひもなく
実もこゝろハ清経が雲もこゝろもきよ
つねの仏果をえしこそありがたけれ

采女

口半白
是ハ諸国一見の僧にて候我此程
ハ都に候ひしが洛陽の寺社残り
なく拝みめぐりて候又是より南都
へまゐらばやと思ひ候
和 サシ 比はやよひの
十日余りの花の都を立出て
こゝろとめて春のころめの
上歌 影ともに我も都

挑くる里月ツく跡るあした乃竹うさ
霞深草山のもゑつくさず情の宿を
ききこえくうぢの甲宿井手の里
ごもは是ぞ奈良坂やがもとうれさて
よつさよきりく　こゑて猿よ吉日乃
行とよ寒くいおもよ社をまへさりやと
思ひ口　宮路あくしき書日野のく

寺みもいざやしまろん　更闌夜去門が
あて四所明神乃寶前に勝るたる
燈もよどを宵過くる數かく若ぶ燈心
深夜乃月も朧こと松乃木乃まとをう
気ハ神の御心みもあくおおくやわほ
まへ一月よもちれ花の陰ゆく宮あ
まこのとまこふあきの枝よろもくる

づきる桜の雪の庭までも色そふる紫の
さかりの花をたぐへたる藤のかゝるあたり
などか言ふばかりなくうれしく
ワキ詞 いかに申候
是なる女性に尋ね申さばやと存じ候
女詞 こなたの事にて候か何事にて候ぞ
ワキ 見申せばこれ程に殊勝なる林に
宮居もなく末社とも見えざるは不審に候
女詞 仰の當社の事をめでたく御尋の人にて
候へ ワキ さん候始めて此所に参りて候
御當社の謂委しく御語り候へ 女 抑當社
と申すは神護景雲二年に河内の国
牧岡より三笠山本宮の峯に影
向ありしより此方されば此山本宮を御蓋山の
陰一つの宮居もなく木陰に宿りありしを

隆頼ましてや藤原や氏人よりてこゝへ
しまれ本寺よりもめくこそ深きゆへに程なく
妙やうよ太山ともあれ御きは高社のつは
ちゝひふさし人のしま指定よ外しきまき
たこの紫雲一葉もましるよ付きくや
まねつきて惜こ給ふも行ゆへうくへの
まつるひ志きゝ末れ隆深まれと今も

みなおほよ新判所説もとうへ黒むりざ分きし怠
爲萬行乃白れ影ハ三笠の山よ長閑
よく五重唯識の月乃をそれば玄日れ
まとなくすまれし　隆頼こたりし　まゝ好
唯かりそめふうつるともずる本國去成
佛の神木と思召ありおまね思ひ給ひそ
あゝゝ〳〵の其初めく深まる國ハ久方

ればめぐみさかんなり、よろづの仏ひろきを
香積りて仏法流布の所となり、昔
ところ霊鷲山にして妙法華経を説き給ふ
今の衆生を度せんとて大明神と顕
れ此山に住給へば、鷲の御山とも云
此山を拝せよ、菩提樹の木陰
とも盛ある藤咲て、松にかゝる花までも
山長閑なる霊山の浄土の春にならぶ
めでたく
女詞
いろくに猿沢の池とて
早詞
隠れなき名池のいはれを語りて聞かせ給へ
所なる名池なくば、教へ給へ
女十
方
へ出て見ん、猿沢の池なくば、見えず
思ふ子細の有へば、此池の邊にて御経を
よみ給ひて跡とぶらひ給へ
早
采女の事

佛事をなされつゝ法施を心さし
て弔ひ申へき　女「是はむかし采
女といひし人猿沢の池に身を投空しくな
成しなりされはある帝の御時の哥に
わきもこかねくたれかみを猿沢の
池の玉もとみるそかなしきと読る哥
の心を思ひ出されなは　ワキ「宮て

は哥ハ家なられてんも妻はあはれ人
女「昔天の帝の御時に独の采女ありし
かうねかしは君に仕へまいらせしなかり
初ハ叡慮浅からさりしにほとなくあくは
心かはりしを恨みまいらせ思ひをとう
さしまゐらせて猿沢の池に身をなけ空しく
成し也　ワキ詞「宮て秋もきこしめしては帝

あはれと思召此猿沢に御幸なりて

女詞 采女が死骸を叡覧ありし時　ワキ上 さしも

うるはしかりし　女 翡翠のかんざし

女 さし嬋娟の鬢　ワキ かつらの眉墨

女 たんくわの唇　ワキ 柔和の姿引かへて

二人 池のもくづにみだれうくを君もあはれを

思召　上哥 吾妹子がねくたれ髪を

猿沢の池の玉藻と見なしそ

悲しきと叡慮に勅し御情天照るなれ

志まもとして気色もとうみしきうれさを

たらんなあさき水の月さる猿沢の池を

事 写るとれてほのかにや采女の幽霊とて

シテ 池水に入るとも池の底に入りにけり

ワキ上哥 池の浪よる汀に座をしめてく候

みるもつれ幻乃ぶ目めれきねの名もよ
げみの御法の流あれく 有難や
称ある法をうるあれもしば心の水をぞ知
さぶらふく法をとあるぞうで心れ
さる程に此池の蓮の茎を取らせ能を
とりて糸ひ染へとよ 不思議や此池の
行よ頭を剃り給ふば宰女とぞ申るへ中将

女 懐しありかへ乃宰女もぞろもと
あるいはきわり佛果をえしめて 給ひし
ワキ 粉 かくすもしへて同じ仏陀也 行疑
女 ひも浪乃うへ 水に底ありところ門や
地 乃玉手来國ありく 女 悪道成佛
ワキ うちひなし ましてや人間よぞく
とらや龍女うきうく 我モちかや変成男子

あり采女と思ひ給へる志こそ有れ

ふだらくの南乃岸に到りて見えそ

南方無垢世界生るゝ事を輕しやく

宮やいにしへよ奈良の都乃代とかへらく

神と君との道すぐにて國家を守る誓ひ

とかや　然れば君に仕へ人其志深く

葉れた浅き山ノ井をきゝて采女の花衣

ぞら淺乃心ぞくだきし島に仕へなれ

はりま女よ其名をひろく晴ちに

ことり宮城野に有あらくため世

まつらうひとしかはりとも葛城

の大君勅に随ひみちのくぞ有りし

ちぎり頃も讀とも浅うそうあり

とてまつりをおこしさりきれども

あらやさしや大君の心とけさせ給ひし宰
女なる女のかざしを見しその袖の
露の情も心とけ数度されたまへる
うれしやあれはあさか山陰さへ見ゆる山乃井
の浅くは人を思ふの心乃うちひかを
代も治まり雲静かなる今をあはれ
とかや 舞楽もと宰女乃戯れの袂

よそほふる花鳥のどけき月の雲乃
袖かげもめぐるやさかの杯の御遊の
みぎりの折とも宰女乃衣の袖をのべて大
宮人の小忌衣桜をかざしあたより
げにも名高き祥雲あらたなる舞
歌の曲拍子をそろへ袖をひるがへして
遊楽快然たる宰女乃衣たへありがたき

流れんや曲水の宴乃有し時盃
堂ひくらうがりの月かさやけく山ほ
とききひさずひ鳥まるに数さもとうけ
て遊楽乃月よあけ　舞　月よなきを
ごころ地　天津
むかし雲井の袖ふるときも
そらは乃万代迄も万代と限らし
御代をあふぐ長かつきも尽きぬはゞ

なき世松の葉乃散りうせずしてまさきの
葛の長くつたはり鳥の跡絶えずして
天地おだやかに国土安穏に四海波静か
あるに猿沢の池乃面ぞ澤の池
池面に水滑かにとして浪までも静かく
みどりや雲さくに雲起りて風ハ
そよ〳〵と打渡り遊楽のよそほひ是

悲母のたちまち仏果をえしも讃仏乗
の因縁なる物をよく弔ひ給へやと
て又浪に入りぬる波の底に入
りにけり

葵上

大臣詞
是ハ朱雀院に仕へ奉る臣下也
扨も左大臣の御息女葵上の御物のけ
以外に御座候程に貴僧高僧を請し
申し大法秘法醫療様々の事
御座候へ共更に其験なし此に照日の
神子とて隠れなき梓の上手の候を

ちくしやう生霊死霊の因果をあづさよりを
けさやせと乃筆子ら祈よ洪由や
付ちをあはれやかてありけよ
渧かけ作へ
浄門外清浄六根清浄なりとさとと
和 天清浄地清
そよりくるあづちは乃おしきれ船寸
手綱ゆりを 三門の車は法の道

火宅の門をや出らん 夕良の宿の
風まし車やるかるはなきにこそおどきれ
上
うき世牛の車乃くるりや報
まあれらん 凡輪回る車のまとく
六趣四生を出でらん人間の不定食蓮
泡沫乃あはれびの日の花やさかの
夢の現るうねようえ愚あわれ身のうきよ

人の恨の猶そひて忘れもやらぬ我思ひせめてや暫し慰むと梓の弓に怨霊の是まで現れ出でたるなり

あら恥かしや今とても忍び車の我姿月をば眺め明かすとも月には見えじ陽炎の梓の弓のうら弭に立ち寄りうきを語らん

梓の弓の音はいづくぞ梓の弓の音はいづくぞ東屋の母屋の妻戸に居たれども姿なければ問ふ人もなし

不思議やな誰とも見えぬ上臈の破れ車に召されたるに青き女房と思しき人の牛もなき車の轅に取付きさめざめと泣き給ふ痛はしさよ若しかやうの人にてや

天人 大方は根元よりて唯一(?)まことなる
なきやらん 地 其安楽世界の境に
ざらむ 栖つき人を神(?)遊びも(?)なさけ
あらはれ出て さてうれしさのあまりに
(?)などをあつさの弓の上(?)よびはれやかなる
これ出たるやさ(?)とうとまりもやら
見ぬ方(?)の御息所の怨霊あり
我世に有し古へは 雲上の花の宴(?)
栄花の御遊にまじれば(?) 仙洞の春のみどり(?)
あるおよへば月にたえ(?) 書子(?)
(?)身をなさけも 暮るる(?)
槿の日かげまつまの栄かな
いとはかなき秋の野辺の早蕨(?)
乃ぞ(?)出和(?)思ひの露は(?)

晴さんかとて是迄あらはれ出る也
思ひしらすや世の中の情ハ人乃為ならす
我人の為つらけれハ
必身にもむくふなり何を歎くそ
葛の葉のうらみハさらに盡まじく
あら恨めしや今ハうたてハかなふまじ
あらあさましや六条乃御息所

程の御身にてうはなり打乃御振舞
いかてさる事乃候へき唯思召留り
給へ いやいかに云とも今ハうたでハ
叶ふましとて枕に立寄ちやうと打てハ
此上ハとて立よりて童ハ跡にて
苦を見する 今の恨みハありし報ひ
瞋恚のほむらハ 身をこかす 思ひしれ

あらもとや思ひまはせは心や
苦しき身の心やぐ乃うき世なりけり
あそびき羽よおもひを給ふものかさそ此
安きよ夢さい嵯峨澤鳴邊の蛍
哀歌よみとも君こそ契らん
わらはひ逢坐乃ましわらひもと
恋ぞしばしは乃の露と消えなん

ことに思ひ絶わし我学よたまうつらね句
を我ちりきりむけし柿の葉まし
扨こ思ひまれ鏡を面影もかりや
まくうよたてるやま車うものをかくれ
ゆかよく いうて誰ちあれ髪上の
御物乃きつよく以外よ云所ゝ有よ
擬門乃小聖と賞してありけりへ

ワキ上「九識の窓の前十乗の床のほとりに
瑜伽の法水をたゝへ三密の月を澄まし
所に案内申さんとはいかなる者ぞ
ワキ「此間は別行の子細ありて行方へも知ら
ぬ所に候へども大臣よりの御使と候ほど
にやがてまゐらうずるにて候 大臣「唯と急ぎ出
御大事にて候 ワキ「さて御病人はいづくに
御座候ぞ 大臣「あれなる大床に御座候
ワキ「さらばやがて加持しやうずるにて
候 大臣「頼みまう ワキ上「行者は加持にまゐらんと
役の行者の跡を継ぎ胎金両部の
峰を分け七宝の露を払ひし篠
懸に不浄を隔つる忍辱の袈裟赤
木の数珠のいらたかをさら〱と押

まします一祈誓のためまし曩謨三
曼陀縛日羅赧 いふて行者をや
擁護しうへからすしてかならす給ふなよ
縦いかなる悪灵ありとも行者乃法
力つく押さへらるる珠數を押をして
東方に降三世明王 南方軍荼
利夜叉 西方大威徳明王や 北方

金剛夜叉明王 中央大聖不
動明王曩謨三曼多縛日羅赧旋
陀摩訶嚕遮那娑婆多耶吽多羅
吒干鋡 聴我説者得大智恵知我心
者即身成佛 あらくおそろしけ
般若声をや 是ぞ怒霊地のう
まことも有かたや 讀誦乃声こそ守

時々く悪鬼心を和らげ忍辱慈
悲の姿にて菩薩もここに来迎
す成仏得脱の身となりゆくぞ
有難き

弟二

遊行柳

帰るさ知らぬ旅衣法にこころ
や急ぐらん　是ハ諸国遊行の
聖にて我一遍上人の教を受遊
行の利益を六十余州に廣め六十
万人決定往生の札を普く衆
生に与へ候此程ハ上総の国にさふらひ

是より奥へと志し　ひろき秋津洲の
国々めぐる法の道迷はぬ
月も光りそふ心の奥を白河の関
路ときけハ秋風も立つ夕霧の
いづくにか今宵ハ宿をかり衣日も
夕暮になりにけり　急ぎ候ほどに
音に聞し白河の関をも過ぬ又是

よりあまたの道のみへて候　廣き方へ
ゆかはやと思ひ候　遊行
上人の御供の人に申べき事の候
遊行の聖とハわれなれバ何事にてさふらふぞや
老足成としてみ急ぎ候へ　シテ　有難やされ
ども給ふ人しまつ先の遊行の御
下向の時も古道とて昔の海道を通らせ

通りけしも世ざれハ昔の道をも教へや
けんとてそろく是迄まいりたり
ワキ
かゝさや扨ハ先の遊行も此道をあらぬ
古道とてさりけりつの有しよあらす
シテ詞
昔ハ此道にておはれハみえたる一村
の森のこおるこの竹影とて通りたり
古道也其上朽木の柳とて名木あ

トカヽル
りなから貴き上人乃法の色ハ草
木までも成仏の縁ある結縁たり
下
てあるこの柳を見んとて召さる馬よハあ
らねとも道ある事ありかき給へ
上哥
念人うちけりおとこらうかゝん
跡絶て荒れつる葎蓬ましからやも
みかれおひける蔦葛や袖にかゝり

秋の霜露かゝりてこれハ昔を語る
古塚に朽木の柳枝さびて陰踏道ハ
末もなく風のミ渡る気色かな
是社昔乃海道にて候へ又是成古
塚の上なる社朽木の柳にて候
御覧候へ　扨ハ此塚の上なるが朽木
乃柳なくひしきるやうう河岸も
水絶て河ぞひ柳朽ある若木ハそ
れともみえわかぬ蔦葛乃はひかゝり
青苔梢を埋む様誠に星霜
年ふりたり　扨いづれ世よりの名
木やらん委語り給へ　昔乃
人の申置しハ鳥羽院の北面佐藤
兵衛教清出家し西行と申せし

まへ此國に下り給ひし所ハ水堂
月半なるに此河岸のこなたなる
を立より給ひつゝ一首を詠し給ひ
しなり　謂をきけば面白や扨ハ西行
上人の詠吟ハ行きの言の葉やらん
六時不断に勧めの隙なき内にも
此集を見れバ讀しきるか新古今よ

道のべに清水流るゝ柳蔭しば
しとてこそ立ちとまりつれと詠じ
乃歌の昔の跡とも猶残る古木ハあれ
つゝやうそて老人上人の御十念を
給り御前をさるとみえつるが朽木の
柳の古塚によるとみえてうせにき
かくさや柳ハ朽木乃柳の

我よこゑをかつきるよと思ひれ
昧のねんごろに御法をなして称名の
声うちそふる初夜の鐘 月も曇らぬ
ぬよそひかる露をかたしく袂かく
シテ上 流水紋海燕ゝへては柳浄きよ
ひつゝく剃髪よ至る侍よ朽木の柳
地 時をえて 今ぞ御法よあひ竹の

シテ 直よ道びく弥陀の教へ 衆生称名
必得往生の功力よ 引かるゝ老木迄も
仏果よ至る老木の柳の髪も乱るゝ
白髪の老人ゆめと顕れ出づるほ
しも柳さびたる枯木あり かゝるや
おかしも古塚の草深く朽木の柳の
木の本より其様したれ老人の

ゑぼし狩衣をさしつゝき給ふも
不審あり　何とて不審し給ふぞ
ぞや我姿ハあらつぎぬ目にも見ゑ翁
乃道教へをし其老人こそ世　翁
着乃道教へをし人ハ朽木乃柳の精
御法乃教へなかりせバ非情無心乃草
木の臺にいたる事あらし　中く

あはや一念十念　唯一色のうちにま
まさく　弥陀の教を　かようきく
此界一人念佛名西方便有一蓮
生但使一生常不退此花還つて宴
よろこびを上生上至をなす姪
しき　釈迦もさては倣しく勧いまに
生をひく弥陀乃悲願をたのまれへいこそ

弘誓にいるへき　クリ　地　南無や灑濁歸
命頂礼本願いつわりましまさぬ超
世の悲願に身を任せそ他力の舟に
のりの道　則彼岸に至らん一葉
の舟のちかうありしや彼皇帝のくわ
てきといふ心ばや秋吹風の音に散る
柳の一葉の上に蜘蛛乃乗りて
いかみが糸引渡る波より工みをきれ舟
の道是も柳の徳ならずや　其外
玄宗華清宮にも宮前の楊柳寺
前乃花とて詠め絶ぬ名木なり
名　又のわか洛陽や清水寺のいにしへ五
色にみえし瀧浪を尋登りし水上
に金色の光りさし朽木の柳忽に

ぞ楊柳観音とあらはれ給ふ絶えぬ
誓ひこめらく利生あらたなる歩をも
てふ霊地也けりされば都は花盛大宮
人の御遊にも蹴鞠の庭の面四本
の木陰枝垂れて暮に数ある沓の
音柳桜をこきまぜて錦をかざ
る諸人の花やかなるや小簾の隙

もる風の匂ひくる手飼の虎の引
綱もながき思ひよなうれ柏木
のゑひあまさ恋路をもよしあしや是さる
名たる柳の狩衣もいかさ折りもの
みゆるよみえそとのつよつさいもよや
名木の柳気力なくてよハくと
立まふもし夢人を現とみるぞはかさ

シテ下 をしへうれしき法の道　迷はぬ月よ
つれてゆかん　舞　シテ上 青柳に鶯つたふ
羽風のまひ　地 柳花苑とうたふも
シテ下 ほうしよきる　柳乃曲も歌舞の
菩薩の舞の袂をかへしもどく人の
法をきゝよろこぶ　報謝の舞も是
迄なりと名残乃なみだの　玉にも

ぬきゝらず青柳の　シテ いとま申ゆかんと　地 翁は曲よへ
ゆふつきの鳥もあさき
シテ 柳陰をわかれぬ　地 手折はあともきさ
下シテ いにしへもたちやうよ　地 むかしを今古木の
下シテ 枝をすてゝ　上 天とかりの風や
いとまんとだつよ夢はさめともよろづく
よつくとだなれかし　柳かなはな乃

床の草の枕のひと夜の契りも他
生の縁ある上人の御法の西吹く秋の風
うち払ひ露も木の葉も散り
露もこのはもちり〴〵になり果
て残る朽木となりにけり

右之本者観世太夫織部
章句眞本令放行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛